



## 社会の時間概念 生成・変化・回帰の時間

**(Citation)**

社会の時間 : 新たな「時間の社会学」の構築へ向けて:55-56

**(Issue Date)**

2022-06-30

**(Resource Type)**

research report

**(Version)**

Accepted Manuscript

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009410>



## 第2部 社会の時間概念 生成・変化・回帰の時間

第2部「社会の時間概念 生成・変化・回帰の時間」では、G. ジンメル、G. H. ミード、九鬼周造の時間論を取り上げる。ジンメルとミードは社会学者であるが、その議論の哲学的な色彩の強さと難解さゆえ、精緻な読解に基づく理解が積み重ねられてきたとは言い難い。だが彼らの時間論は、既存の社会学的な時間論では等閑視されてきた「生成」や「変化」といった観点から独自の時間論を展開しており、時間の社会学をさらに発展させるうえで避けて通ることはできない。

また、本論集の第1部を見ても分かる通り、西洋が発祥である社会学においては、当然そこで取り上げられる事例や世界観も西洋のものに限定されがちだという限界を抱えている。そこで本論集では、時間の社会学が暗黙の前提としている西洋的な時間の見方を相対化するために、東洋哲学をベースに「回帰」という観点から時間を論じている九鬼周造を取り上げている。以下、各章の内容を紹介しておこう。

第5章「生の時間と歴史の時間 後期ジンメルにおける時間論について」（大窪彬夫）では、後期ジンメルが哲学におけるカントやベルクソンの時間論を批判的に継承しつつ、いかにして生・歴史・歴史学という3つの位相に固有の時間的性質を析出していったのかが解明される。ここでは、「生における時間」が「生の自己超越の運動の意識形態」、「歴史における時間」が「諸瞬間に包括、区別、経過を与え、諸瞬間の統一体として歴史を形成するもの」、「歴史学における時間」が「出来事を歴史学へと構成し、生が自己を認識するもの」だと整理され、ジンメルが自然科学とは異なる人文社会科学に固有の観点から「歴史」を焦点化していたことが明らかになる。このような観点からのジンメルの歴史哲学の解釈は、「質的な社会的時間／量的なクロックタイム」という社会学における区別を、個々人の生にのみ回収できないより広い「歴史」という観点から議論することを可能にするだろう。

第6章「出来事と創発の時間 ミードの時間論から」（木村純）では、「*reality exists in a present*」というミードの命題が、生物学や進化論に由来する「創発〔性〕(emergence)」という概念や、ミード独自の「出来事(event)」や「社会性(sociality)」という概念との関係から検討されている。ここでは、ミードが「創発的なるものが生じる場としての現在」を論じているという点が強調され、ホワイトヘッドの議論との比較からミ-

ドが「生成 (becoming)」に焦点を当てた時間論を展開していることが明らかにされる。さらにミードの議論において、「社会性」が人間の営みにのみ見いだされるものではなく、自然科学が対象とするものにすら見いだせるという展望が示される。上記のようなミードの読解は、時間の社会学に対してなされてきた批判——社会学が「生成」を等閑視してきたという哲学からの批判や、社会学が自然と社会を峻別することで時間の本質を見誤ってきたという社会理論内部からの批判 (B. アダム、J. アーリなど) など——を、社会学的な視点を經由することで乗り越える道を切り開くものである。

第7章「西洋と東洋の回帰的時間 九鬼周造の時間論を手引きに」(藤貫裕)では、九鬼周造の「回帰的形而上学的時間」概念が、円環的回帰の仕方に独自性があるという立場から検討され、哲学の回帰的時間論を時間の社会学における複数時間論の観点から考察する試みがなされている。そこで明らかにされているのは、九鬼の「回帰的形而上学的時間」が、古代ギリシャにおけるストア派の大宇宙年論を、古代インドにおける因果無別論からみた業報輪廻およびシャンカラの「劫波説」をもとに再解釈し統合した特異な円環的時間であるということである。本章の独自性は、円環的回帰と万物再生のあり方が西洋の大宇宙年と東洋思想に基づく形而上学的時間において異なると示した点にある。そのため、本章の知見によって、従来 of 西洋における時間論において「円環的時間」(cyclical time) に回収されることで見逃されてきた多様な時間のあり方が新たに見出されることになるだろう。